

ローカル・アイデンティティの複合性

—概念の使用法に関する検討—¹⁾

大 堀 研

概 要

地域再生の文脈で使用される「ローカル・アイデンティティ」という用語は、これまで複数の意味・水準で使われてきた。明確な概念規定抜きで使用すると、現場に混乱をもたらしかねない。これまでの使用例は、個人レベル（個人の地域に対する帰属意識）と、集合レベル（地域関係者の多くに共有されている地域内の要素）、の二通りに大別できる。現場では、語義を明示して使用する必要があり、コミュニケーション・コストは高い。だが「アイデンティティ」という語は「自己認識」の意識を喚起する利点がある。ただし正負の両側面の複合的な自己認識が求められる。また「アイデンティティ」の語が誘発する本質化の危険性を避けるために、「ローカル・アイデンティティ」を、変化し得るものと把握することが必要である。一方で「アイデンティティ」と言う以上、保持すべき要素の弁別も欠かせない。ここでも複合的な認識が求められる。地域の複合性を捉えるツールとすることに、「ローカル・アイデンティティ」の語を用いる意義を見出すことができる。

キーワード

ローカル・アイデンティティ、本質主義、自己認識、複合性

I. 問題設定

岩手県釜石市での調査結果報告である『希望学』2巻、3巻では、「ローカル・アイデンティティ」がキーワードの一つとなっている（東大社研・玄田・中村編，2009a，2009b）。具体的には、地域再生²⁾のためには「希望の共有」「地域内外でのネットワーク形成」に加え

1) 本稿は、(大堀，2009b)を大幅に改稿したものである。改稿にあたって、石倉義博先生（早稲田大学）から様々な示唆を受けた。記して感謝申し上げます。

2) 該当の箇所は、正確には「地域における希望の萌芽を、その実現へと結びつけるため」（に必要なもの）と記述されている（中村・玄田，2009，xv頁）。宇野重規は、「地域再生におけるローカル・アイデンティ

「ローカル・アイデンティティの再構築」の三点が必要、との仮説を提示している（中村・玄田，2009，xv頁）。また同書2巻で収録された計7編の論文のうち、本稿筆者のものも含めた3編でこの用語が使用されている（東大社研・玄田・中村編，2009a）。

だがこれらの書籍の中では、「ローカル・アイデンティティ」という語の意味については、「地域の個性」「地域らしさ」という言い換えが提示されている程度で、詳細な概念規定がなされているわけではない。Ⅲ節でみるように、これまでこの用語はいくつか別々の意味で使用されてきており、確定的な定義が存在するわけではない。そのため、明確に概念規定をしておかないと、地域再生など各地の実践的な現場で使用する場合に混乱をもたらしかねない。

特に「アイデンティティ」には様々な含意があり、訳語として適当なものを見出すことが難しい。また近年は、アイデンティティ概念が持つ本質主義的含意をめぐって批判的検討が加えられている。たとえば2005年には、上野千鶴子の編集による『脱アイデンティティ』という書物が出版されている（上野，2005）。こうした状況を考慮すると、「アイデンティティ」は無造作に使用して良い用語ではない。「ローカル・アイデンティティ」についても、慎重な検討が必要であろう。

だが、地域再生の文脈で「アイデンティティ」の語が使用されることは少ないわけではない。適切な使用の仕方であれば、地域再生のツールの一つとなる可能性がある。そこで本稿では、「ローカル・アイデンティティ」のこれまでの使用のされ方、可能な使用方法を検討する。Ⅱ節でアイデンティティ概念とそれに対する批判を簡単に検討する。その上で「ローカル・アイデンティティ」について、まずⅢ節で、これまでの使用のされ方を整理し、語の使用に伴う問題を検討する。次にⅣ節で、現場における可能な使用法を、適宜釜石市の事例にも触れながら考察する。

Ⅱ. アイデンティティ概念とその批判

「アイデンティティ」とは、パーソナリティの一貫性や独自性を表現するのに使用される概念である。この概念を本格的に学問に導入したE.H.エリクソンは、自己が同一・連続しているという感覚と、自己（の同一性）が社会的に承認されているという感覚の二つからなる心理の状態を表現する概念として、「アイデンティティ」の語を使用した（エリクソン，1973，10頁）。すなわち、「アイデンティティ」概念はまずは個人レベルの事象

ティのはたす役割」としている（宇野，2009，112頁）。

を問題化するものとして学問に導入された。

訳語としては、「同一性」(同じであること)が充てられることが多い。そもそも‘identity’は、ラテン語で「同じ」を表す‘idem’を語源としていることが知られている(たとえば(Hague, 2005, p.5)などを参照)。したがって「同一性」は基本的な訳語である。だが、「同一性」だけでは、エリクソンが指摘する社会的承認の側面が十分に表現されるとは言い難い。

また、個人のパーソナリティに関する用語として、上記の二点とも微妙に異なる意味合いの訳語が使用されることもある。たとえば児玉・深田は、「職業的アイデンティティ」を「職業領域における自分らしさの感覚」と表現している(児玉・深田, 2006, 19頁)。「identity」は「自分らしさ」に置換されている。「自分らしさ」の基礎に「同一性」があると考えられる。だが「同一性」だけでは「自分らしさ」までもを表示することはできないだろう。他の使用のされ方を簡便に確認するために、複数の辞書を参照しよう。すると、「存在証明」「独自性」「個性」「帰属意識」などが出てくる(図表1)。どの熟語の語義も、重なる点はあるものの、基本的には異なる。たとえば「帰属意識」は、実体的には個人の同一性を形成する一要素ではあるだろうが、「同一性」という熟語から自動的に導出されるとまではいえない。これらから、「アイデンティティ」が多義的に使用されていることが確認できる。日本語の熟語に置き換えるにしても、複数の熟語を併用せざるをえないだろう。

近年、アイデンティティ概念は多くの論者によって批判され、再検討されている。多様な論点があるが、主要なものとして以下の二点があげられる。

一つは、アイデンティティ概念に含まれる、時間的な連続性あるいは一貫性という含意に対する批判である。人間は生涯を通じて変化する存在である。だが、アイデンティティ概念がもつ連続性、一貫性という含意は、個人に「変わることはない本質」が存在するこ

図表1 辞書によるアイデンティティ/identityの定義

広辞苑 (第6版)	①人格における存在証明または同一性。ある人が一個の人格として時間的・空間的に一貫して存在している認識をもち、それが他者や共同体からも認められていること。自己同一性。同一性。 ②ある人や組織がもっている、他者から区別される独自の性質や特徴、「企業の——を明確にする」
明鏡国語辞典 (初版)	①自己が他と区別されて、ほかならぬ自分であると感じられるときの、その感覚や意識を言う語。自己同一性。自我同一性。(以下略)
ジーニアス英和辞典(第4版)	①本人であること、同一物であること；自己統一性、帰属意識、(自己の)存在証明、生きた[ている]証(あか)し；独自性、自己認識；身元、正体 ②個性；独自性、固有性、主体性；(作家・芸術家などの)作風；芸風(以下略)
新社会学辞典 (初版) ^{注2}	自我によって統合されたパーソナリティが社会および文化とどのように相互作用し合っているのかを説明する言葉。訳語としては、同一性、主体性、自己確認、帰属意識、居場所などがある。(以下略)

(注1) 新社会学辞典以外は、カシオ製電子辞書 EX-word XD-SP6600 (2008年1月発売) に収録されているもの。

(注2) 有斐閣『新社会学辞典』1993年。

とを前提としているかにみえる³⁾。この点が、実相と異なるものとして批判されることとなる。たとえば、男性同性愛者を調査した伊野真一は、被調査者の以下のような発言を伝えている。この発言は、「変わることをない本質」への批判を直接的に表している。

ゲイと自称しているにもかかわらず、アイデンティティという言葉は嫌いだと言っている人は、「性的指向は一生変わらないと思うが、未来に対してこうだと宣言するような感覚が嫌だ。規定されたくない」と語っている。(伊野, 2005, 67頁)

第二に、いわば「カテゴリーの同質性」に対する批判がある。たとえばジュディス・バトラーは以下のように述べている。

「女」というカテゴリーは規範的なもの、排他的なものであり、このカテゴリーが引きあいに出されると、かならず階級や人種の特権の次元はしるしづけられないまま放っておかれると主張する女たちのなかから、この包括化の身ぶりに対して多くの批判が生まれてきた(中略)。換言すれば、女というカテゴリーの一貫性や統一性に固執すれば、具体的な種々の「女たち」が構築されるさいの文化的、社会的、政治的な交錯の多様性を、結果的に無視してしまうことになる。(バトラー, 1999, 41頁)

バトラーが問題としているのは、「女」に属する人間全てを同質的とみなすような思考である。「女」であっても、民族や階級などの差異によってその内実は多様であり、一括りに論じることはできない。あるカテゴリーが、それに属する人間全てに共通の本質を保証するわけではない。

このようにアイデンティティ概念に対する批判は、それが孕む本質主義的含意に向けてなされている。人間のアイデンティティ、あるいはそれを構成する属性について、本質的内実を前提とすることを問題としている。そもそもエリクソンがこの概念を導入したとき、個人のアイデンティティは他者による社会的承認を必要とするものとされていた。実際、ある個人がいかに関心のある特性を言い募ろうとも、他者がそれを承認しなければ、アイデンティティと呼べるものにはならないであろう。その意味で、個人のアイデンティティは本来に対話的、社会的なものといえる。そして、ある個人と他者との関係は、個人の変容過程に併せて変化するものであるから、アイデンティティもまた変化・変形していくと考えることができる。ここから、アイデンティティを個人に内属する本質とみなすのではなく、他者との関係の中で常に構築され変化し続けるものとして再概念化しようとする議論も提出されている。たとえばスチュアート・ホールは「アイデンティティは根源的に歴史化に従うものであり、たえず変化・変形のプロセスのなかにある」(ホール編, 2001, 12頁)と述べている。こうした再概念化の方向性は妥当なものに思える。だが別言すれば、「ア

3) 「自分らしさ」という表現も、過去・現在・未来を通じて「変わらない自分」を想定しがちである。

「アイデンティティ」という用語を使用するには上記のような注釈が必要になるということでもある。

Ⅲ. 「ローカル・アイデンティティ」のこれまでの使用法

1. 個人レベルと集合レベルの使用法

本項では、「ローカル・アイデンティティ」という語がこれまでどのように使用されてきたかを検討する。前節でみたように、エリクソンはアイデンティティ概念を個人に関するものとして用いていた⁴⁾。では「ローカル・アイデンティティ」という語はどのような意味で使用されてきたのだろうか。

たとえば「ナショナル・アイデンティティ」や「エスニック・アイデンティティ」という表現がある。「アイデンティティ」に修飾語を付した表現は一般的に用いられる。ただし、国家帰属・国籍や民族は、人格を構成する要素であって、個人の人格の全てではない。したがって、アイデンティティ概念が個人に関するものであるとすれば、「ナショナル・アイデンティティ」は、ある個人のアイデンティティを構成するもののうちのナショナルな要素、と解すべきである⁵⁾。あるいは、個人が保持している、国家に対する帰属意識である。ある社会学のテキストでは、「「ナショナルなモノ」に対して自身を一体化させる感情」(田辺, 2008, 289頁)と定義されている。ナショナル・アイデンティティが、個人を形成する一要素として解されている。

ところが、「ナショナル・アイデンティティ」やそれに類する表現が、個人レベルではないものを表現する場合がある。一例をみよう。鹿児島県は、「九州・山口の近代化産業遺産群」として世界遺産登録を目指している6県12市⁶⁾の一つである(2009年10月現在)(この世界遺産登録運動には釜石市も関係している⁷⁾)。そのウェブページには、「九州・山口

4) ただし注9)でみるように、エリクソンは「集団的アイデンティティ」についても言及している。

5) 石川准が「わたし」とはアイデンティティの集合、アイデンティティの束だということだ(石川, 1992, 14頁)と書くとき、そこで使用される「アイデンティティ」は、「ナショナル・アイデンティティ(ナショナルな要素)」や「エスニック・アイデンティティ(エスニックな要素)」などであり、エリクソンが使用した(何も修飾語がない)「アイデンティティ」の構成要素をなしているはずのものである。

6) 福岡県, 佐賀県, 長崎県, 熊本県, 鹿児島県, 山口県, 北九州市, 大牟田市, 飯塚市, 田川市, 佐賀市, 唐津市, 長崎市, 荒尾市, 宇城市, 鹿児島市, 下関市, 萩市。佐賀市は2009年8月から参加。(http://www.kyuyama.jp/action/a01.html, 2010年1月アクセス。)

7) 2009年10月22日に東京で開催されたシンポジウムにおいて、登録推進協議会の専門家委員会により、構成資産群に釜石市の橋野高炉跡も含めることを内容とする提言書が発表された。

の近代化産業遺産群」を世界遺産とすることは、工業国家日本のアイデンティティーを示す観点から、我が国の取り組みとしても大変有意義です⁸⁾とある。この記述での「(工業)国家(日本)のアイデンティティー」は、個人レベルではなく、国全体レベルのアイデンティティという意味で使用されているといえる。我々が特に意識せず「ナショナル・アイデンティティ」と口にするときも、「国の個性」「国の特徴」などの意味合いで使用していることがあるのではないか。この場合も、言及の対象となっているのは個人レベルではなく、国全体ということになる。

このように、「アイデンティティ」の前に何らかの集合的な形容が付け加えられると、個人レベルと集合レベルの二通りの解釈が成り立つ⁹⁾。

「ローカル・アイデンティティ」についても同様のことが指摘できる。たとえば渡邊洋子は、「ローカル・アイデンティティ」を「ローカルな諸価値で人々の内面に複合的に形成される意識」と定義している(渡邊, 2008: 131頁)。個人のアイデンティティを構成するローカルな要素を表現している。また、この用語が(ナショナル・アイデンティティと同様に)、ある個人の、地域に対する帰属意識や愛着、誇りという意味合いで使用されることもある(「私は釜石にアイデンティティがある」)。

このように、「ローカル・アイデンティティ」も、個人レベルで使用されることがある。その定義は、個人のパーソナリティにおけるローカルな要素、あるいは地域に対する帰属意識、などとなる。個人レベルの場合、ある個人が、地域のどの要素を自己のアイデンティティと関連させるか、またそもそもローカルな要素をアイデンティティとして保持するかどうかは、当該個人が選択しうるものであるべきで、少なくとも他者から強要されるべきではないであろう。したがって、たとえばある人は地域の歴史を自己のアイデンティティの要素とし、別の人は地域の名称に愛着をもっているということがありうる。また、地域外に居住する人間(非住民)が、ある地域に対してアイデンティティを保持している場合も想定できる。

8) <http://www.pref.kagoshima.jp/kyoiku-bunka/isan/kindai/touroku.html>. 2009年10月アクセス。

9) エリクソン自身も「集団的アイデンティティ」という語を用いている。

スー族のアイデンティティにおいては、前歴史的な過去というものが、強力な心理的現実を構成している。したがって、この征服された部族は、現在に対する消極的抵抗とか、昔の栄光時代の復活の夢とかからなる生活設計によってあたかも導かれているかのように、振舞い続けてきている。(エリクソン, 1982, 53頁)

ここでの「スー族のアイデンティティ」は、集団の成員の多く(または全員)が共有している心理的現実、あるいは行動規範として理解することができる。

また社会運動論の分野では、運動へ諸個人を動員する要因としての「集合的アイデンティティ」についての研究が進められている。メルッチは「集合的アイデンティティとは、相互に交流している諸個人によって生み出される、相互作用的でありかつ共有された定義である」と定義している(メルッチ, 1997, 29頁)。ここでの論点に関連する用語として検討すべきだが、本稿では割愛し今後の課題とする。同概念については、(Friedman and McAdam, 1992) や(川北, 2004)などに詳しい。

これに対して、集合レベルでの使用例もみられる。たとえば武田尚子は、論文「地域のアイデンティティの形成」の中で、広島県田島村（現福山市）が「マニラへの移民送出の村」として自他ともに位置づけられ、部落内の社会構造もその方向に再編成されていった過程を「地域のアイデンティティの確立過程」と表現している（武田，1999：117頁）。別の箇所では、「地域のアイデンティティ」は、（柿崎京一のいう）「村の個性」が表現されたもの、と述べている。この論文の英訳タイトルは‘The Development of Local Identity’であり、武田の場合、「地域のアイデンティティ」あるいは‘Local Identity’という用語は、「地域全体の特性」「地域の個性」という意味合いで、すなわち集合レベルで使用されている。また旧自治省は、1985年に全国市町村要覧の別巻として『ローカル アイデンティティ』と題した書籍を発売している。その中での定義は、「地域社会の一体感の醸成と地域個性の発揮—いわゆる「ローカル・アイデンティティ」の確立—」（自治省行政局振興課編，1985，序）となっている。ここでも集合レベルで使用されている。

以上より、「ローカル・アイデンティティ」も、個人レベルと集合レベルの両方で用いられていることが確認できる。混乱を招きがちな用語といえる。使用例が「ナショナル・アイデンティティ」より少ない点を考慮すると¹⁰⁾、より曖昧な用語といえるだろう。

なお集合レベルの「ローカル・アイデンティティ」の定義については、簡易なものとしては、上記でみたような「地域の個性」「地域らしさ」などとなるだろう。だが、本稿ではもう少し詳しく規定しておきたい。次項で、語の使用に伴う問題と併せて考察を進める。

2. 個人レベルと集合レベルの「重なり」

上述したように「ローカル・アイデンティティ」は曖昧さを孕む。これを回避するには、使用にあたって個人レベルと集合レベルのどちらの水準なのかを明確にする、という方策を当然に考えることができる。たとえば、Rausch が青森県津軽地方のローカル・アイデンティティを検討した論文の中には、‘collective local identity’ という表現がある（Rausch, 2005, p.124 右）。こうした限定は明確化のための方策一つといえる。また Paasi も、‘regional identity’ 概念を検討する論文の中で、‘it is useful to distinguish analytically between the identity of a region and the regional identity (or regional consciousness) of the people living in it or outside it’（Paasi, 2003, p.478）と記述している。ひと

10) インターネット書籍販売の Amazon (<http://www.amazon.co.jp/>) で「ナショナル・アイデンティティ」の和書を検索すると 11 件がヒット、「ローカル・アイデンティティ」は 2 件である。そのうち 1 冊は先述した自治省行政局振興課編の著書であり、もう 1 冊も先述の希望学釜石調査の書籍である（2009 年 5 月アクセス）。

まずは個人レベルと集合レベルを区分することが、「ローカル・アイデンティティ」(または「リージョナル・アイデンティティ」)の検討のための一般的な方策であるといえそうである。

だが、ここではもう少し注意深く考えてみたい。果たして個人レベルと集合レベルの区分には問題はないのか。そこで、成田龍一による「故郷」概念についての記述をみておこう。

「故郷」は、個人の心情や感情、あるいはアイデンティティとむすびついているが、共同の心情やアイデンティティとも密接に関連している。言語学でいうところの、ラングとパロールの関係——すなわち、個人が話すことばが、一人ひとり異なっているものの、そのことば=発話を可能とし互いが理解できるようにする規則体系が同時に存在することと同様の関係が、「故郷」をめぐる存在している。景観をはじめとする、「故郷」に関する共通の記憶——すなわち集合的記憶が「故郷」という共感の共同性をつくりだし、共同性を支えていく。しかも共同性の次元の「故郷」は、個人の「故郷」にもとづく関係性と語りの総体でありつつ、個人の「故郷」への感情を規制しているのである。(成田, 1998, 3-4頁)

成田が述べていることは、「故郷」を巡る個人的感情や記憶が、集合的なそれらと相互に関連して形成されるということである。これは「アイデンティティ」についても同様ではないか。

個人レベルのローカル・アイデンティティ(個人が感じる地域の個性、地域への帰属意識)は、地域の歴史や文化などを背景に形成されることになる。ここで個人が地域のどの要素を自己のローカル・アイデンティティとして保持するかは、繰り返しになるが各人の選択が可能なもの(のはず)である。したがって、ある地域で、地域住民(の多く)が共有している要素が存在しないということはありうる。だが、地域住民(の多く)がある要素を共有している場合もある。たとえば釜石市民の比較的多くが釜石市を「鉄のまち」または「ラグビーのまち」と考えている、などである。釜石市の「近代製鉄発祥の地」「ラグビー日本選手権7連覇」のような特異な歴史や文化は、教育や報道等の場で集合的に伝達される機会が増加する。そのため、多くの地域住民の間で共有されやすい。すなわち、集合的な表象に基づき個人レベルのローカル・アイデンティティが形成されることになる。また共有されうる要素は、上述したように特異な歴史や文化である場合が多いため、観光資源化などにより地域外部の主体へ伝達される機会も増加するだろう。このような要素が、内外共に「地域の個性」として認知されるのではないか。以上から、集合レベルの「ローカル・アイデンティティ」は、「地域関係者の多くが共有している要素」と定義できる。これは、より正確には「個人レベルのローカル・アイデンティティが比較的多くの地域関係者で共通していること」と言い換えられよう。

ところで、前項でみた旧自治省による書籍『ローカル・アイデンティティ』では、その大半を自治体のスローガンの紹介に費やしている。ここから「ローカル・アイデンティティ」

の定義を引き出すとすれば、「自治体行政が設定するスローガンあるいはキャッチフレーズ」となる。このように、集合レベルの「ローカル・アイデンティティ」は、大まかにみても二通りの定義を考えることができる。だが自治体行政が設定するとしても、地域関係者のほとんどが共有していないような要素がスローガンに選択された場合、その有効性は低いだろう。

上記より、ローカル・アイデンティティは、個人レベルと集合レベルとが関連しつつ形成されるものといえる。バウマンは、クロード・デュバルの定義を引きつつ、アイデンティティとは「個人的であると同時に集団的」（バウマン、2007、10頁）なものと述べている。これはそのままローカル・アイデンティティにもあてはまる。

とすれば、個人レベルと集合レベルを単純に区分するだけでは、両者の往還関係をみないこととなる。本来接続しているものの切断は、議論の単純化を招く危険性がある。たとえば個人レベルを無視して集合レベルのみを論じてしまうと、下記IV節2項でみるような少数者の排除につながりかねない。

以上より、「ローカル・アイデンティティ」の語は、分析的には個人レベルと集合レベルを区分せざるを得ないとしても、両レベルを含む曖昧なものであることを前提とすることが必要と考える。ある程度煩雑な文章（および思考）が要求される、コミュニケーション・コストが比較的高い用語と言い得る。ここには、「アイデンティティ」という用語を使うことの困難の一つが表示されている。

IV. 道具としての「ローカル・アイデンティティ」

1. 地域の自己認識の深化

前節では、「ローカル・アイデンティティ」のこれまでの使用法から導出される定義として、個人レベルと集合レベルのものを提示した。個人レベルの定義としては、個人にとっての地域に対する帰属意識、愛着、などとなる。集合レベルのものは、「地域関係者の多くが共有している要素」である。集合レベルの場合、さらに、「自治体行政が設定するスローガンあるいはキャッチフレーズ」を加えることも可能である。研究者であれば、これらのうちどれを用いるかは各人の関心による。上記二つ（または三つ）のどれか、あるいはさらに別の定義を明示しつつ使用することになるであろう。

この語を、地域の現場において地域再生などの文脈で用いる場合には、より慎重さが求められよう。用語を使用する主体としては、地域再生を主導する組織、具体的には、自治

体行政と非行政的組織（NPO等）の二通りを大きくは想定することができる。だがどちらが使用するにせよ、Ⅱ節でみたように、アイデンティティ概念は複雑なものであり、日本語にも訳し難い。そのため、「ローカル・アイデンティティ」という語を使用するにも明確に語義提示をする必要があり、コミュニケーション・コストが高い。各地の現場においては、「アイデンティティ」の語を放棄し、文脈に合わせて適切な日本語を使用する方が簡便かもしれない。

ところが、地域再生の文脈で「アイデンティティ」の語が使用される例が散見されるのも事実である。たとえば「地元学」の提唱者の一人であり、水俣市の市職員であった吉本哲郎は以下のように述べている。

アイデンティティ閉塞症という症状があります。ヨーロッパの美しい農村風景や人の話に、かぶれたりすべてを拒否したりするという過剰な反応がおきるのは、両方ともアイデンティティ閉塞症という病気です。自分や地域を知らないからおきる過剰な反応、自分や地域に自信がないことからおきる極端な反応です。

変化をゆっくりなじませながら受け入れていくためには、地域と自分を知り、地域の個性や特徴を把握していること、したがって自分や地域に自信をもっていることが必要です。そうでなければ、変化に対応できずにのたうちまわることになります。変わらずにあえいだり、変わりすぎて伝統文化や個性などを壊してしまいかねないことになります。（吉本、2008、30-31頁）近年、水俣市は環境都市の構築に向けてごみ分別・リサイクルなど積極的な施策を展開しており、全国的に注目されている。そうした展開は、水俣病問題を反省した上で選択されたものであったことが、「アイデンティティ」の語を使用しつつ語られている¹¹⁾。

また、北海道空知支庁が09年に発表した『元気そらち！産炭地域活性化戦略』でも「アイデンティティ」の語が各所で使用されている¹²⁾。たとえば「地域の見せ方」を検討している箇所では、「炭鉱まちとして栄えた地域のオリジンを地域アイデンティティを伝える資源として活用することが、地域イメージを確立する上でも重要となる」（北海道空知支庁、2009、58頁）という記述がみられる。ここでもまた、「地域活性化」が「アイデンティティ」と結びつけられて論じられていることを確認できる。

地域再生や地域活性化の文脈において「アイデンティティ」を用いる意義があるとすれば、どのような点に求めることができるか。吉本の文章から汲み取るならば、それは「地

11) 水俣市の近年の動向については（大堀、2007）で簡単に整理した。そこでも述べたが、水俣病は現在でも解決されているとはいえない点に留意すべきである。

12) 旧産炭地研究会・NPO法人炭鉱の記憶推進事業団・早稲田大学ライフコースアーカイブ研究所の主催によるシンポジウム「日本とウェールズにおける炭鉱の記憶：地域再生へのアーカイブスと社会教育の役割」（2009年8月7日・8日）において示唆を得た。

域の自己認識の深化」となるだろう。「アイデンティティ」とは「自分がどのような存在か」という問題に関わる用語であり、「自己認識」という訳語があてられることもある(図表1参照)。この語を用いることは、自己認識が論点となっているという意識を喚起するのに適している。吉本がいうように、地域の歴史、現状、資源などを精確に把握することは、未来への方向性を構築する上で基本的な作業といえる。逆に自己認識を欠いたままでは方向性を誤ることもありうる。

この点で特に注意すべきなのは、「衰退している」、すなわち人口や経済規模等の縮小が比較的進行している地域である。そうした地域は、過去の状況を多少なりとも維持しようとして無理な活性化策をとりかねない。釜石市でも、新日鐵の合理化に伴い経済規模の縮小、人口減少が進んだ。その事実が、市の施策の根底的な部分を規定している。たとえば市の総合計画をみれば、「人口減に伴うまちの活力低下が最大の懸案」(釜石市, 2001, 13頁)、「地場産業の低迷や人口の減少が続いています」(釜石市, 2006, 8頁)などと記述されている。そうした認識が出てくることはやむを得ない。だが、岩手県内の他の市町村との比較の上では、釜石市の状況は悪い方ではない。平成19年度の市町村内純生産は、岩手県内35市町村中7位である。また同年度の財政力指数は0.52で、35市町村中6位である(図表2)。絶対的な意味では経済・財政的に厳しい状況にあるものの、相対的にはまだ余裕を残している。こうした状況を認識せず、「衰退」のラベルにとらわれすぎると、

図表2 平成19年度の岩手県市町村の市町村内純生産(上段,単位:千円), および財政力指数(下段)の一覧

盛岡市	867,715,097	久慈市	84,103,785	山田町	31,410,742	葛巻町	15,634,407
奥州市	295,575,480	二戸市	67,584,358	岩手町	29,115,576	西和賀町	15,431,477
北上市	290,880,989	遠野市	67,387,966	洋野町	24,933,437	九戸村	12,886,175
一関市	277,891,667	金ヶ崎町	66,724,470	一戸町	26,991,070	住田村	11,467,034
花巻市	221,913,546	矢巾町	65,204,383	大槌町	24,933,437	田野畑村	8,151,082
宮古市	127,651,773	八幡平市	58,830,441	岩泉町	24,098,747	野田村	7,643,147
釜石市	107,485,083	紫波町	57,359,953	軽米町	18,965,131	川井村	6,856,532
大船渡市	103,250,254	陸前高田	41,827,123	平泉町	17,604,178	普代村	5,882,774
滝沢村	89,433,236	雫石町	36,257,260	藤沢町	17,557,986		

盛岡市	0.74	雫石町	0.42	岩手町	0.30	九戸村	0.19
北上市	0.69	宮古市	0.41	一戸町	0.30	野田村	0.18
滝沢村	0.61	奥州市	0.41	山田町	0.29	葛巻町	0.17
矢巾町	0.60	一関市	0.39	遠野市	0.28	西和賀町	0.17
金ヶ崎町	0.58	久慈市	0.38	陸前高田	0.28	岩泉町	0.15
釜石市	0.52	二戸市	0.34	藤沢町	0.23	田野畑村	0.15
花巻市	0.46	八幡平市	0.33	軽米町	0.22	普代村	0.15
大船渡市	0.44	平泉町	0.33	洋野町	0.22	川井村	0.12
紫波町	0.43	大槌町	0.32	住田町	0.19		

注1) 市町村内純生産は岩手県「平成19年度 岩手県の市町村民所得」(<http://www3.pref.iwate.jp/webdb/view/outside/s14Tokei/top.html>, 09年11月アクセス)。

注2) 財政力指数は総務省「平成19年度 地方公共団体の主要財政指標一覧」(http://www.soumu.go.jp/iken/zaisei/H19_chiho.html, 09年11日アクセス)。

注3) 川井村は2010年1月1日に宮古市と合併。

「活性化」にばかり力点を置き、それ以外の問題が軽視される危険性もある。また、「衰退」という用語の反復は、個々の住民の心理を悲観的な方向に誘導し、活動意欲の低下や、地域の将来に対する諦め（＝個人レベルのローカル・アイデンティティの低下）などをもたらしかねない。地域についての精確な自己認識は欠かすことができない。

だが同時に、「自己認識」は、正の側面だけに限られてはならない。細見和之は著書『アイデンティティ／他者性』の中で、プリーモ・レーヴィとパウル・ツェランという、自身や両親がナチスの収容所に囚われた経験をもつ二人の詩人がともに自殺していることに基づき、「記憶の他者性」（細見，1999，16頁）について論じている¹³⁾。（個人の）アイデンティティの源泉たる記憶に、個人を破壊しかねない負の記憶もまた刻み込まれていることの指摘である。

地域においても、その歴史には負の側面も必ずや含まれているだろう。負の歴史、すなわち過去の失敗や問題についての真摯な反省を経ずに、将来展望が開けるとは考えにくい。同じ失敗を繰り返す恐れもある。この点に関連し、先に引用した元水俣市職員の吉本は、以下のように述べている。

ボールを前に投げるためには、いったん後ろにふりかぶります。前を未来に、後ろを過去だとみると、人は夢を描き希望のもてる未来のために過去を振り返るのです。過去におきた水俣病事件に目をそむけず、未来に夢を描いて共有し、環境都市・水俣をつくることが水俣のとり道だったのです。（吉本，2008，9頁）

近年水俣市が注目されているのは、水俣病を発生させたという過去を反省し、環境都市の構築を目標に据えた点にあった。負の歴史の認識が、経済発展や人口増などに即座に結びつくというわけではない¹⁴⁾。だが水俣市では、それにより（良い意味での）注目を集めることに成功した。水俣市民が地域に対する自信や帰属意識（＝個人レベルのローカル・アイデンティティ）を高めることにもつながるだろう。水俣市の事例を参照すれば、意味のある自己認識とは、正負の側面を複合的に認識することと言い得る。「ローカル・アイデンティティ」というと、「地域の誇り」、すなわち正の側面の意識ばかりを喚起する可能性が高いだけに、負の側面も併せて認識することの必要性は高いだろう。

2. 変化を促すツール／保持すべき要素の弁別

だが、「ローカル・アイデンティティ」の語を使用するにあたっては、さらに別の注意

13) 同書ではさらに在日朝鮮人の詩人である金時鐘がとりあげられている。

14) 国勢調査によれば、水俣市の人口は1980年で37,150人、2005年で29,120人。

も必要と考える。それは、集合レベルの「ローカル・アイデンティティ」を本質化することによる問題である。本質化が起こると、集合レベルのローカル・アイデンティティは、個人に対し排他的・差別的に作用する危険性がある。たとえば、釜石には現在も新日鐵の工場は存在するが、1989年に高炉は廃止されている。工場では鉄を加工しているのであって、作ってはいない。こうした状況から、釜石の中においても、鉄はもはや釜石の特徴とはいえないという人物が存在するかもしれない。ところがこの人物は、釜石において排他的に扱われるかもしれない（「お前は釜石人じゃない」）。

さらに、個人レベルでのローカル・アイデンティティの保持を本質化するような議論にも危険性がある。Ⅲ節1項で引用した渡邊が、沖縄での伝統芸能を題材とした論文のなかで引用した、住民の発言をみてみよう。

村遊びの中で芸能を通しながら、青年たちがムラの歴史や、文化や、ムラの成り立ちや、有り様や、価値観や、生き方から様々なものを学んでいく。そして、その青年がしっかり村を支えていく。（渡邊，2008：p.141）

ここでの論理は、「住民が地域（内の要素）への帰属意識・愛着（＝個人レベルのローカル・アイデンティティ）をもつことにより、当該住民は地域づくりの主体となる（それにより地域が維持、または再生される）」というものである。論理自体は妥当なものであろう。だがこうした論理が、仮に「地域再生のために地域住民は帰属意識や（ある要素に対する）愛着をもつべき」と、各人にローカル・アイデンティティを強要するようなものに転化してしまうと、個人の変化・発展を阻害する可能性がある（他所への転出による教育・就業の機会の減少など）。そもそも、帰属意識や愛着をもちたくとも、社会的・経済的状况がそれを許さないということもありうる（たとえば釜石では仕事が見つからない、など）。

上記より、「ローカル・アイデンティティ」の本質化には、地域内のある要素を本質として絶対視するものと、個人にローカル・アイデンティティ保持を強制するものの二通りを考えることができる。いずれも、個人に対し差別的・抑圧的に作用することがありうる。語の使用に当たっては、その点に留意する必要がある。

また集合レベルの場合、何かを本質的要素としてしまうことで、新しい要素を取り入れる傾向が弱まる可能性もある。環境変化への対応が不十分となるかもしれない。釜石市の場合を例示すると、市では現在でも「鉄のまち」という表現が頻繁に使用される。だが、上述したように、製鉄所は残されてはいるものの現在では鉄は作られてはいない。その中で、「鉄のまち」という表現がいかなる意味をもつのかは明らかではない。「鉄」を「工業」と読み替えることは可能だが、その場合、食品製造業が含まれるのか、含まれるとすれば「鉄」という表現は適切か、などの問題がある。釜石市は「近代製鉄発祥の地」という特異な歴史をもつ。それを考慮すれば「鉄」を放棄すべきではないとしても、安易に寄りか

かっているだけで将来の「発展」がもたらされるというものでもない（(大堀, 2009a) も参照）。

これを踏まえれば、アイデンティティと同様に、集合レベルのローカル・アイデンティティも、形成されるもの、変化し続けるものとして把握し直すことが必要であろう。変化することを前提とすれば、個人レベルで少数派的な要素を集合レベルのローカル・アイデンティティに編入していく可能性が開かれる。また、都市部などを中心に、自治体名称以外には地域住民が共有する要素が存在しないということもあるだろう。すなわちローカル・アイデンティティがそもそも成立していないことになる。その場合でも、形成されるものという視点を導入すれば、新たに共有される要素を創出していくこともできる。

換言すれば、ローカル・アイデンティティ概念の使用にあたっては、形成されるもの、更新されるものという注釈も必要ということになる。語の使用にとまなうコミュニケーション・コストはさらに増大する。だがそれこそが、変化を促す契機となる可能性がある。「形成されるもの、更新されるもの」という注釈はコミュニケーション・コストを増大させるものの、同時に、語の受け手に対して「形成・更新」を意識付けする効果を望むことができる。使用主体が意識的に使用することで、「ローカル・アイデンティティ」が、変化を促すツールとなりうるのではないか。

ただし、変化を強調するだけではバランスを欠くことになる。中澤秀雄は、「集合的アイデンティティ」を「(個人の) 同一性のよりどころが特定の集団に共有されている状態」(中澤, 2009, 35 頁) と定義し¹⁵⁾、具体的には自然環境や歴史的町並みなどがそのシンボルになるとする。その上で、まちづくりの現場においてはそうした要素を保持することの重要性が認識されるようになっているとし、安易な改変、破壊に警鐘を鳴らしている。

本項ではここまで、本質化の危険性を指摘してきた。それとは矛盾するようであるものの、一方で中澤の指摘の通り、どの地域にも、保持すべき、あるいは住民の多くが保持したいと考えているような要素もまた存在するであろう。とすれば、本質化することの危険性を意識しながらも、保持すべき要素を弁別することも欠くことはできない。「同一性」を基本的含意とする「アイデンティティ」の語を用いる以上、これも必要な作業となるのではないか。

まとめれば、何かを変化させることに加え、何かを保持すること、この両面を検討することが地域に求められていると考える。換言すれば、(IV節1項と同じく) ここでもまた複合的な認識の重要性が高まっていると言える。

15) 「集合的アイデンティティ」については注9も参照。

V. 結語

本稿でとりあげた「ローカル・アイデンティティ」の語を使用することに伴う問題点をまとめ直そう。第一に、「アイデンティティ」という語を用いることで本質主義的思考を喚起する危険性がある。地域の「本質」に対する（さらには地域に対する）愛着などを住民に対して強要するような思考が発生する危険性である。第二に、これを回避するには、語の使用にあたってアイデンティティの形成性・更新性などの注釈を付加する必要があり、コミュニケーション・コストが高まる。

だが、この点に「(ローカル・) アイデンティティ」の語を用いる利点を見出したい。グローバル化が深化する世界にあって、地域もその影響を強く受けるようになっていく。変化の激しい状況の中で、地域は複合的な自己認識を形成することが必要であり、安直な思考は避けるべきであろう。コミュニケーション・コストの高い、複合的な意味を持たざるを得ない「アイデンティティ」の語を使用するからこそ、そうした地域の状況に適合した認識が開かれる可能性がある。複雑さを捉えるツールとすること、ここに「ローカル・アイデンティティ」の語を用いる意義があると考えられる。

最後に、今後の主要な課題を二点述べておきたい¹⁶⁾。第一に、ローカル・アイデンティティが地域の経済的活性化や制度的課題の解決と接続するか否か、接続するならばどのような論理によってか、などについての検討が必要である。地域に関する複合的な自己認識が、地域課題の解決に結びつくのか、具体的な事例を基に考えることが求められよう。

第二に、本稿では検討できなかったが、「ローカル」についても検討を加える必要がある。欧米では、‘regional identity’の表現も比較的一般的である¹⁷⁾。また‘local’や‘regional’についてはこれまでも様々に検討が加えられている。どちらを用いるのが適切か、それともさらに別の語彙を用いるべきか、語義の検討も含めて考察を進めたい。

16) その他の課題として注9)も参照。また、社会学や地理学における「場所」概念や「風土」概念と、ローカル・アイデンティティとの対比も必要であろう。玉野井芳郎の「地域主義」や鶴見和子の「内発的發展」などの議論との比較、接続ということも考え得る。

17) たとえばインターネット書籍販売のAmazon (<http://www.amazon.co.jp/>)で、洋書に限定したうえで‘regional identity’を検索すると、結果は68冊である（同一書籍のハードカバーとペーパーバックが重複している場合がある）。これに対して‘local identity’は20冊である（2009年11月アクセス）。

参考文献

(邦文)

- 石川 准, 1992, 『アイデンティティ・ゲーム 存在証明の社会学』新評論
- 伊野真一, 2005, 「脱アイデンティティの政治」上野編著, 2005, 43-76 頁
- 上野千鶴子編著, 2005, 『脱アイデンティティ』勁草書房
- 宇野重規, 2009, 「釜石市長としての鈴木東民」東大社研・玄田・中村編, 2009a, 109-141 頁
- エリクソン, E (小此木啓吾訳), 1973, 『自我同一性』誠信書房 (原著 1959)
- (岩瀬庸理訳), 1982, 『アイデンティティ (改訂版)』金沢文庫 (原著 1968)
- 大堀 研, 2007, 「釜石市のグリーン・ツーリズムと都市イメージ」(東京大学社会科学研究所希望学ディスカッションペーパーシリーズ)
- , 2009a, 「グリーン・ツーリズムが育てるもの」東大社研・玄田・中村編, 2009a, 269-299 頁
- , 2009b, 「ローカル・アイデンティティ概念の検討」(東京大学社会科学研究所希望学ディスカッションペーパーシリーズ)
- 川北 稔, 2004, 「社会運動と集合的アイデンティティ」曾良中清司・長谷川公一・町村敬志・樋口直人編『社会運動という公共空間』成文堂, 53-82 頁
- 児玉真樹子・深田博己, 2006, 「生産性に関連する態度や行動に及ぼす職業的アイデンティティの影響」『広島大学心理学研究』第6号, 19-25 頁
- 自治省行政局振興課編, 1985, 『ローカル アイデンティティ 全国市町村要覧 別巻』第一法規
- 武田尚子, 1999, 「地域のアイデンティティの形成」『社会学評論』第50巻第3号, 117-132 頁
- 田辺俊介, 2008, 「日本人」であるとはいかなることか——ISSP2003 調査に見る日本のナショナル・アイデンティティの現在」南田勝也・辻泉編著『文化社会学の視座』ミネルヴァ書房, 287-308 頁
- 東大社研・玄田有史・中村尚史編, 2009a, 『希望学2 希望の再生 釜石の歴史と産業が語るもの』東京大学出版会
- 東大社研・玄田有史・中村尚史編, 2009b, 『希望学3 希望をつなぐ 釜石からみた地域社会の未来』東京大学出版会
- 中澤秀雄, 2009, 「環境という風景とアイデンティティ」関礼子・中澤秀雄・丸山康司・田中『環境の社会学』有斐閣, 31-47 頁
- 中村尚史・玄田有史, 2009, 「はしがき」東大社研・玄田・中村編, 2009b, iii-x viii 頁
- 成田龍一, 1998, 『「故郷」という物語』吉川弘文館
- バウマン, Z. (伊藤茂訳), 2007, 『アイデンティティ』日本経済評論社 (原著 2004)
- バトラー, J. (竹村和子訳), 1999, 『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社 (原著 1990)
- 細見和之, 1999, 『アイデンティティ/他者性』岩波書店
- 北海道空知支庁, 2009, 『元氣そらち! 産炭地域活性化戦略』
- ホール, S. & ゲイ, P. 編著 (宇波彰・柿沼敏江・佐復秀樹・林完枝・松畑強訳), 2001, 『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』大村書店 (原著 1996)
- メルッチ, A. (山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳), 1997, 『現在に行ける遊牧民』岩波書店 (原著 1989)
- 吉本哲郎, 2008, 『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書
- 渡邊洋子, 2008, 「伝統芸能という「共有知」とローカル・アイデンティティの可能性」『日本の社会教育第52集〈ローカルな知〉の可能性』, 130-144 頁

(欧文)

- Friedman, D., and McAdam, D., 1992, "Collective Identity and Activism", Morris, A. D., & Mueller, C. M., eds., *Frontiers in Social Movement Theory*: Yale University Press, pp.156-173
- Hague, C., 2005, "Planning and Place Identity", Hague, C., and Jenkins, P., eds., *Place Identity, Participation and Planning*: Routledge, pp.3-17
- Paasi, A., 2003, "Region and place: regional identity in question" *Progress in Human Geography* vol.27 no.4: pp.475-485
- Rausch, A. S., 2005, "Local Identity, Cultural Commodities, and Development in Rural Japan", *International Journal of Japanese Sociology* vol.14: pp.122-137